

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
LICENSED PRODUCT



3022
4



3022
4



富士三國一夜物語卷之四

東都

曲亭主人著編



第五編

富士太郎森羅殿の舞臺に召るる夜

富士太郎ハその夜、彼の奴隸とわく合法が衛衛と走らたれども、
逢ふ時、後、其、雙入照行ハそのやとにあり、
て集焚地獄も眼前なるお極々もよらて一堆の灰を掃き、
死骸と素ね岩ハ肚ハ裂く血と灰を塗る五體あり、
そのやとにあり、
わりのかやめく志を勵、奴隸とよも是を早て墨江おまう、
村主兵助も又後、間、撃、母の三雲も危う、
と様子が太鼓をおく

二目六六日

彼此人を會合しつゝ照行あまの害怕て忽地逃去るゝと聞てまき
 憤りてえもどきの一處に在るらば兵刃を撃せまほ。あつもの
 照行あまのまきと立地を撃とあつて空へ走りせつゝまき
 惜けきと蹉跎して悔恨の母も様もいと理と思ふのうらま
 悲しきひとの変もてく。面影も今般の苦痛堆量松方後方と立
 そひて焼野の雉のろくくと落る涙の露の身もまきと消んと泣
 ままの實や無常の風は靡く富士の煙のありひもも雙人の往方
 向とあまの富士太郎の夜明て後天王寺のわらうに到てくひそつ小籠六
 照行のその夜さう逐電一老母卯原のまきにありと聞えつゝまき
 ては速く仇を報くまきまきまき。まき父と村主が後のまき



ども。宮と果んと思ひて直み走りたり。その夜茶臼山の
 北よりける。一心寺の西の亡骸を送りて仮の葬をまき
 あつらふ樂書の中笙の巻ハ義満公殊更憂ふひ
 往み更て領下へおひて後ハ右門常の身を放さまき
 魔堂めて焼死せるとまき懐みあつらふまき
 主ともみ焼亡けるらるる華洛の空えまき
 御氣色ゆるあるべしと占とまき。匿一課をまき

ね。右門が枉死樂書の焼失浅間が為体ま。録して華洛み上。復讐の願ひたてまる。義満公委細み聞食て照行が残忍の増いべしと。遺恨の本末を糾明せよ。是非を定め。人殺し。父の讐を報んと欲する。復讐の誓を報んと欲する。但樂書を焼失する。忽の至り。過ち重く。富士浅間両家の所領を没収し。後日。過ちを補ふ功の。環さる。命出。

ける。富士太郎畏て墨江の宅地を引退き。身之暇を。五六町。浅澤の片。古より草舎を。親子三人。住む。主が。佛。追善を。更。他。亦浅間が母の。兇照行が。富士右門主。斬害して。逃去。老。狗の家を。心持。阿部野の。住家。を。為。日。を。雄。老。女。取。色。も。顯。一。日。富。上。太。郎。が。家。の。訪。来。て。富。士。浅。間。ハ。正。一。家。の。親。あり。と。遠。祖。の。確。



三目巻六四

執しつより。胡越こくわつの思おもひをううらうらうの右門みぎかどぬぬ不意ふい發跡はつせきて。
 津國つのくにの立たちちるるの思おもひひはは外ほかのともも人ひともも少すくざざいいとと然しか。
 びてびけりけししの照行てうかう年弱ねんじやくけけままとと色いろをを媚めいかかりりひひけんけん親おや。
 くもく交まららむむ却かてて白しろきき眼まなこめてめて見みままららむむももららむむ痛いた痛いたくくて。
 母ははいいちちををくく諫いさなししの彼用かれもちひひぎぎるるののももららむむ終つひのの浅あままきき。
 所ところ為なささるるぬぬ吾身われみもも仇あだの親おやををばばささとと憎にくししとと察さつすす。
 今昔いまむかしののううららししをを思おもふふ悪人あくにんの親おやももりりともとも必かならむむ悪人あくにんもも。
 言ことふふももああららむむううれれととそそもも生なままねねどど是こゝらら前まへ世よよりよりの
 悪業あくごふををままぶぶりりののみみととももせんせんままるる吾身われみのの真ま愛あいいくくららぶ
 ままばば痛いたままくくもも又また面おもてををくくてて壽ことほままらら恥はぢぢおおろろきき世よのの立たちちるるもも。

ああららぬぬ身みのの思おもふふややどどもも安やすええ進すすららせせ潔けつくく自じ言ごんせせむむをを。
 推おしてて参まゐりりけけりりつつのの以も訖しつりり豫よてて用もち意いややままららけけんん懐くわい劍けん。
 ろろりり出でししててままららししとと引ひ技ぎ既すでにに吮すすみみ衝つききととんんととままるるをを三雲さんぐも。
 櫻さくら子こ楚そととそそのの手てををらら止とままふふ富とみ士し大だい郎らう聽きてて劍けんをを挑ひ。
 せせままちちててりりのの中ちゆう照行てうかうととをを與よめめ天てんをを戴かぶささるるのの雙たわ人にんををれれ我われ。
 此身こゝろのの聊ちやうもも怨うらみみ。ああららむむををららみみてて自じ殺ころめめららぶぶ好意こうい。
 却かてて惡意あくいととりり劍けんをを逆さかみみししてて人ひとをを抱かかみみひひととららへへ。
 此身こゝろのの心こゝろのの清きよききととららむむよよくくららままりりてて生なままるるのの生な害がいののいいひひ。
 曲まがてて思おもひひををままりりめめららししとと理ことわりをを竭きりしてして諫いさなむむ三雲さんぐもをを櫻さくら。
 子こもも又またささららむむめめいいひひここららむむややくく送かりり出でせせしし。

卯原ハ死も死もどとうち泣て阿部野の帰り。とて
 ようとて訪音づきそ憂とて慰を富士太郎然を
 この三年四年以来彼卯原同一浪速に住む。絶て
 一ひも訪来つるのありし既の千鈞の仇とて
 却て親と相語んとする取辱をさする似たり是
 併困る獸の猶夫の押る類ひあるべしと。勝母の
 名と憎て車を返しする例もめづるも此後ハ
 卯原が来てもいりつとてめづるも門よりぞ
 返しける。て春も徒め暮て四月のたふめありぬと
 心慰ひよまかぬく夏山の緑を馳て。雙言人の往

方をおひの杜鵑のちを安て亡父の去りてを
 待とるふ七七の忌日も翌とてその日あり
 追悼作善ハとて。連夜ありとて。富
 士太郎ハ未下刻櫻子を將て一心寺に詣んとする
 折しも卯原食籠め萩の花とて餅を盛つて
 饋来てりやう。この餅ハ婆くが午ささびめ鳩
 のうま味ひつきて美さるるも。なまぬる
 日ハ七七の連夜ありとて。露をろの志
 ける。佛へ供て。餅一ツ轉び落け。とて。誤ちと
 蓋の間より餅一ツ轉び落け。とて。誤ちと

いひまゝ。とらして後方を見たり。庭の瘦る犬の匍
匍するの投與ふまは犬の只一口ふらち食て不欲げの
尾をふらぬ。三雲の櫻子の命て餅を器みうら取せ。
此志のやど浅くむむなど回答まれば。卯原もまをい
四表八表のののぐらう。近きふまの訪ひ進らまべし。
怨み使え置て帰りけり。富士太郎その後影を執
目送りて。世めく嗚呼する者もある。うら。うら。父の彼が子の
撃まらぬひまは。今ふもわは照行の出會は。こは照
行を撃り。照行の返殺めまらう。勝負の時運め
ゆるべけまど。いふを及み鮮で。己べき。あつあつを卯原屢

志を運び信を示して寛んとまらう。老母と父とも其心
甚汚し。渴しをも盗泉を飲むとをまけ。寛家の饋を
めて孰るその父を祭るものあらんやとめを笑ひ。うらま
人の隙費して墓あるは後まらう。いさゆべしといひて。
櫻子をいそがし引母の辞し。ころまて家をとらひて。その嚙
昏れ一心寺ありて。父が墓のまらう。夫婦哀悼の涙を
泣き。又兵助が墓のまらう。千向して佳吉街道を帰る。
只見まは。前面の金殿。玉堂。参差として夕月影の輝
り。奇麗壯觀彷彿王城の異なり。まら。富士太郎
夫婦ふくくわや。日來とま。行くひぬまど。くる殿

三國志之目

造りのあるひんひも見も安も及ぞ奇しきりるこま
かきあひてやうり近く来るとき忽地四足門の裡より一個の
官人走り出て富士太郎ホと呼びよめ今日森羅殿
成就して大王内宴いぬの樂人障るとのりて大
鼓の役を闕ぬふまくるみ汝々へ来つるこそ幸なるこま
つら御内の舞樂ぬ召加へよとの宜旨ありらりくあり
ぬといふ富士太郎安てまがらの人を召るぬ冠裝束延
喜以前の朝服ふ似てそのさぬ唐人めき一々まま
疑ひまごひるら固辞バ罪せらるべしと畏らる夫婦憤
きて裡み入り同トかりる門三ツをりて宮闕の

到きバ正面の螺鈿金字の額を打て森羅殿の三
字と写し左右又聯めきと梵字ぬして讀解かす
その殿中の廣きなる數千人を容れべく柱桷桁天井
鴨柄長押などもまき香木をりて造作すば馥郁として
梅檀の林ぬ入るらごま後狻於兔瑞鳥梧桐緑竹牡丹
丹のいひ或ハ画き或ハ彫て金壁璫と飾り錦障帳と
垂銀燭是星のごく輝て南面の高御座ぬ翠簾と
うみらとる大王の玉座なるへく見えらるら出御
ぬを諸司六曹の判官齊く整くとして両邊の侍
樂人ハ廊のうみ候せりこの時以前の官人いと憂

富士夫婦
不意の
森羅殿の
前を過る



たき装束をりて来て富士太郎被^ま久させ引^ひて樂人^{がくじん}の中^{ちゆう}候^{まち}せしめ櫻子^{さくらこ}と孫^{まご}廂^{ひら}の此^{こゝ}方^{かた}居^ゐし且^{かつ}くして警^{けい}言^{ごん}蹕^しの声^{こゑ}とともみ大王^{おおう}屏^{びん}風^{ふう}の後^{のち}より繞^{めぐ}出^でぬを足^{あし}目^め六^む面^{めん}大^{だい}索^{さく}の如^{ごと}く赤^{あか}く眼^{まなこ}ハ蛇^{へび}の如^{ごと}く方^{かた}鼻^{はな}ハ獅子^{しし}のごとく圓^{まる}み髻^{まげ}ハ虎^{とら}の如^{ごと}く尖^{とが}みし七^{しち}相^{あひま}貌^{まへ}頗^{なほ}兇^{あや}惡^{あく}之^を身^みハ蟒^{まう}衣^いを穿^ゆ腰^{こし}ハ玉^{たま}帶^{おび}を束^{たば}手^てハ玉^{たま}簡^{かん}をとり昂^{たか}然^{ぜん}として高^{たか}御^ご座^ざハ升^{のぼ}り多^{おほ}バ諸^{しよ}司^し百^{ひやく}官^{くわん}禮^{らい}義^ぎと正^{ただ}し參^{まゐ}拜^{ひら}己^{おのれ}ハ畢^{おひ}る折^{をり}しも有^あ司^し奏^{そう}して新^{あらた}發^{はつ}意^いまわりのひぬと言^いふ
 洁^{けつ}所^{じよ}ハ香^{かう}深^{しん}の法^{ほふ}衣^いを被^まて年^{とし}齡^が八^{はち}十^{じゆ}のまりの老^{らう}師^しあら
 申^{まを}み歩^あみ出^で長^{なが}揖^いして王^{わう}のこゝろに坐^ましめんと申^{まを}て伶^{れい}人^{にん}

一^{いつ}齊^{せい}ハ絃^{げん}管^{くわん}を催^{もよほ}し物^{もの}の音^ね妙^{めう}ハ調^{てう}まハ藕^う關^{かん}ハ舞^ま姫^{ひめ}
 鳳^{ほう}冠^{くわん}を戴^{をか}き霞^{せま}帔^ひを装^まひて立^た舞^ま光^{くわう}景^{けい}窈^{やう}窕^{てう}とて目^めを
 教^{しよ}ハを耳^{みみ}と清^{きよ}しハ樂^{がく}ハまゐり安^{やす}城^{じやう}宮^{みやう}菩^ぼ薩^{さつ}天^{てん}人^{にん}樂^{がく}を
 ありける舞^ま樂^{がく}を後^{のち}大^{だい}王^{わう}より人^{にん}ハ飲^{いん}食^{じやく}を賜^{たま}り富^ふ士^し
 太^{たい}郎^{らう}を指^さして老^{らう}師^しハ告^つて言^いハ寡^{くわ}人^{にん}皆^{みな}一^{いつ}個^この雙^{さう}あり
 玉^{たま}帝^{てい}ハ空^{くう}ハ穿^ゆて立^た地^ぢハ罰^{ばつ}せんと思^{おも}ひハ者^{しや}奴^にハ
 命^{めい}數^{すう}竭^{げつ}むあつらふらの富^ふ士^し太^{たい}郎^{らう}ハ年^{とし}多^{おほ}ハ弱^{じやく}し
 母^{はは}ハ事^{こと}ハ純^{じゆん}孝^{かう}ありしと彼^{かれ}を
 雙^{さう}を擊^うて因^{いん}景^{けい}靦^{てん}面^{めん}善^{ぜん}惡^{あく}應^{おう}報^{ぱう}の理^りを示^しさ
 欲^{ほつ}むと彼^{かれ}ハ元^{げん}來^{らい}樂^{がく}人^{にん}の子^こなりその父^{ちち}右^う門^{もん}ハ武^ぶ藝^ぎ

とも倣得しうし。見ぬ教ゆるの音律を先ぬし。りまごとも
 等ののみみ及ざりし。師は是武の道ぬあむて古今肩せ比
 る者もみけは。一條せよのまうさん為ぬ駕を提し
 たり。彼が仇ぬぬんとき用心ともあるべきみと。委細の語り
 聞せぬらまうしと宣ふる。富士太郎はりとう色し。あがえて
 おろく。蹴出し。老師ちり。白て宣はく。小子よ。聞夫
 唐山の十八般の武藝あり。所謂一の弓。二の弩。三の鎗。四の
 刀。五の劍。六の矛。七の盾。八の斧。九の鉞。十の戟。十一の鞭
 十二の簡。十三の槁。十四の矢。十五の必。十六の把頭。十七の
 綿繩。套。十八の白打。こまろり。又本朝の武藝ハ弓馬
カマヤウモノ

劍法。鎗。棒。拳法。水戯の七種ぬし。彼十八般もらの中ぬ
 ともまろり。又劍法ぬ活人劍。殺人刀。向上極意妙劍。十字。半
 裏劍。ホの法あり。但し劍ハ一人ぬ敵するの。よく身を護せ
 り。七寶とも。益射ハ六藝の一ぬし。百千の敵を防ぐべし。
 とせり。稱して。武士を弓と。又。西夫の勇ぬ誇りて
 謀拙く。機ぬ臨む。變ぬ應むる。りあむ。りぬのハ。縦養由
 弓を握りぬ。頂籍が。劍を服も。終ぬ勝利あるべし。
 らの故ぬ兵法ハ形と則し。心を師とも。すて形ハ心より成
 りぬ。るま。りま。太刀ぬくま。と。あ。り。も。一。心。定。る。と。ま。ハ
 金石の堅きを。碎得ぬのぞ。譬ハ汝が抱を以て。大鼓を拍が

ごとし。徒み力を用ゆるとも心定り形整むる音律
 いうをその調み稱ふべき。さうさうの理を推て覺悟せよと
 宣ふ。富士太郎ふく感激し。闇を出て明きあ著くが
 如くさるる。あふへを膝をまくりてのりて。傳うけらるる昔
 鎌倉創業のとき。武藝の古實どもおなく失ひつるを。
 頼朝卿さるく西行法師ト諦めて絶つるを。つぎ廢
 うろを興し。あふと。その後百余年の元弘の乱より。
 只人を斬せ武士の所行とおふへ。さえて古實をあるもの
 あり。言の序の問。まらうまらうまらう。常め人のりらとるる。
 物具と。甲曹の異名めや。又曹めらるる。秋金形の号あり。

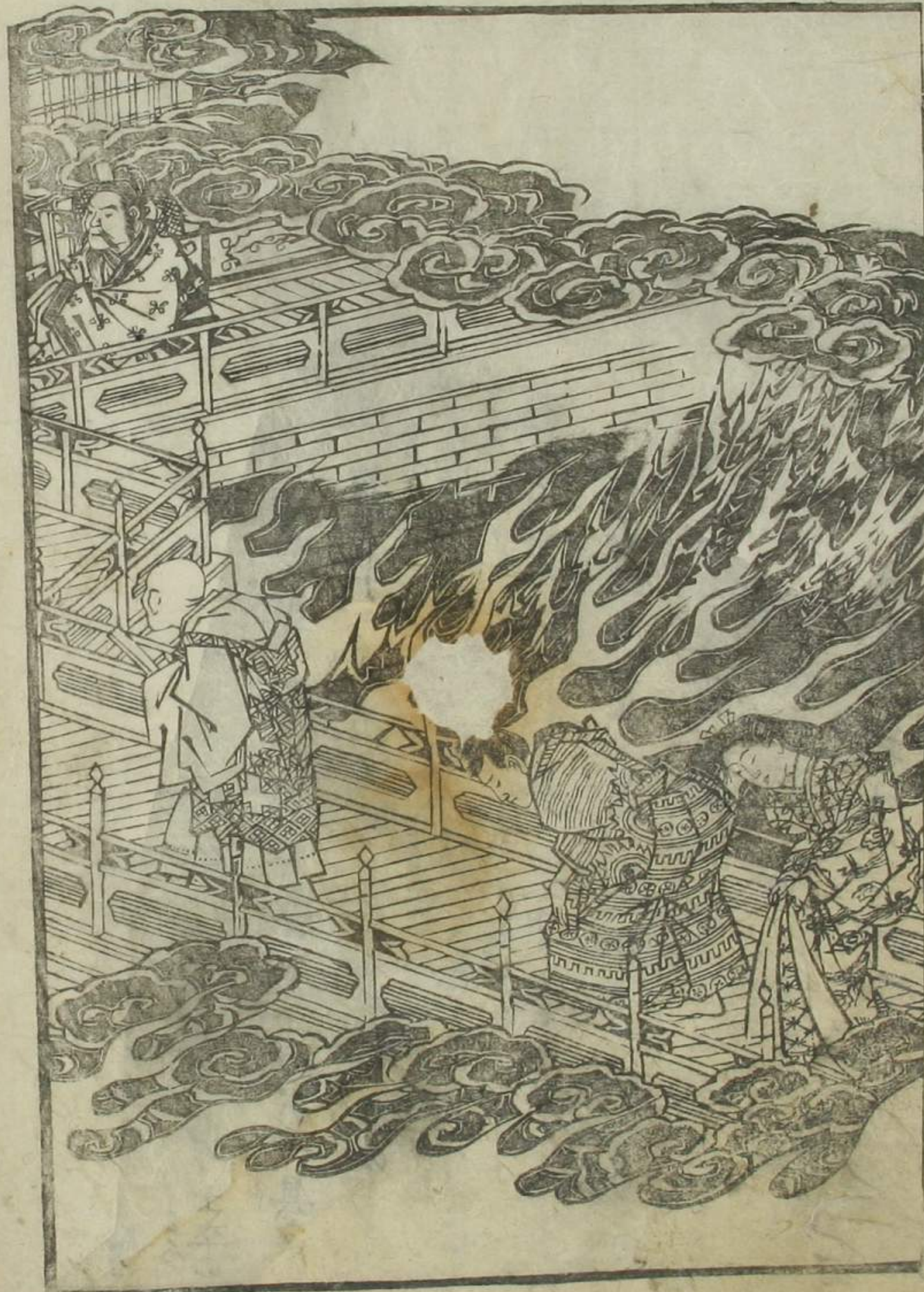
まさ強弓の三人張の稱あり。さるらふのふらるるえける
 べくやと問ふ。老師とさへて。およそ大將の六具あり。士卒の
 六具あり。旄。蔽。團。扇。鞭。鞞。毛。杏。と。大將の六具多。
 又。靺。當。脛。楯。胴。籠。手。首。鎧。頬。當。と。士卒の六具
 多。大六具の繩。蔽。小旗。鞞。扇。と。さるる。ちとを
 きて。物具と稱を。世俗物具と。甲曹のつらとさるる。
 違へり。まさ曹めらるる。とらむ。とらむ。の別。ふあふあふ。さ
 も。盛も。さる曹のさる。まさ。秋金形の秋金の美め。あふ。
 まる。つら。火形。さる。と。龍頭の火。焰を。表して。敵の陽
 氣を示さる。後の人火と。鍬と。讀て。附會の説を。

東



森羅殿
 富士太郎
 武藝の
 古實を
 聞

三目卷之四



きのの。ま弓の三人張の名ある。強弓の。一人張の。引ハきて三人の張と禮と。弦の一人張の。一人の一人以上三人の。一人の張ハ大なる無禮なり。ま弓の強弱を別て。何石の弓と。ま弓の力を量る。あは。その強弱を。著て。是を梁など。釣。末の米俵を。弓の強さを。重く。あは。三石。あは。五石。後世と。誤りて。三人張と。強弓の。あは。富士太郎の。感嘆。笠懸流。鑄馬牛。追物。弓馬の古實。と。問。

諸の。早晩。鶏明。曉を告る。大王。左右の。命。彼。物。と。宣。有。司。錦の。囊。物。を。持。て。富士太郎。を。賜。了。王。と。老師。と。拜。終。退。出。さ。る。と。老師。ま。告。て。宣。く。汝。今。より。後。兩。度。の。危。難。を。只。欲。生。則。死。欲。死。則。生。と。一。句。を。言。ふ。と。命。を。下。す。と。か。り。夜。の。明。と。大。厦。高。樓。忽。然。と。跡。を。下。り。て。合。法。衛。衛。の。閻。魔。堂。ま。の。棟。上。り。て。萱。簷。を。下。り。て。菅。を。下。り。て。裡。に。然。と。し。て。つ。る。居。る。と。疑。ひ。ま。ひ。眼。を。定。て。見。る。と。石。の。閻。王。曩。の。火。の。燒。き。の。と。り。ど。も。缺。損。を。

る。さふ。於て。富士太郎。俄然と。し。て。た。ち。あ。り。て。曉。得。櫻。子。の。傳。り。の。け。り。の。間。羅。王。往。古。より。天。驗。掲。焉。し。と。い。ひ。り。て。傳。た。る。果。し。て。違。つ。て。疇。昔。見。え。な。り。さ。る。大。王。ハ。こ。の。間。君。の。あ。る。森。羅。殿。新。の。成。就。せ。し。と。聞。え。し。の。堂。の。り。の。ま。へ。に。あ。る。大。王。告。言。し。て。こ。の。ま。へ。に。人。の。者。奴。共。富。士。太。郎。の。擊。せ。因。果。靦。面。の。理。を。示。さん。と。宣。ひ。し。浅。間。照。行。が。更。り。ん。照。行。往。り。の。父。を。擊。ん。と。さ。の。堂。を。焼。し。く。雙。人。と。宣。ひ。け。り。又。彼。兵。法。を。説。示。し。の。る。老。師。ハ。多。田。の。天。廟。満。仲。朝。臣。の。神。靈。の。あ。り。ぬ。り。こ。の。ま。へ。に。年。又。田。の。

神社へ詣りて尊像ハ馬上甲冑の打粉ハ在せども。彼老師の相貌より肖さる。今按むる貞元二年八月十五日。満仲朝臣祝髪して新發意満慶と號し。又と舊記に見えし。う。り。ま。は。彼。神。靈。僧。形。を。現。し。の。り。も。又。据。る。ま。は。あ。り。ぬ。り。の。ま。へ。に。間。王。の。こ。の。ま。へ。に。も。衣。服。の。間。を。く。探。ま。は。是。夢。を。て。懐。の。残。り。ま。は。奇。あ。り。て。忙。し。く。打。ひ。し。見。る。父。と。共。に。焼。亡。し。し。ん。と。思。ひ。つ。つ。篋。の。秘。書。を。め。り。し。且。歡。び。且。驚。ま。は。夫。婦。齊。し。合。掌。し。俯。て。拜。し。仰。て。尊。を。感。涙。を。ぬ。り。け。り。且。し。て。富。士。太。郎。ま。は。い。か。ら。し。ま。は。豫。て。父。の。忌。日。に。果。し。て。首。途。と。

雙言人と索んと思ひし今く神佛の冥助あり少しも
 猶豫なきありしを立てて母也も光景を語まわす
 せんとしよふ櫻子もゆよく勇まを母君くともあり召さ
 ねば盡夜心苦しめひけん。歸りぬくといそがしそ夫
 婦閻魔堂を走り出づ遙かの方に向ひて冥廟を拜し
 託り遂に浅沢を望て走去

高木あふ



三國一夜物語卷之四了

わんわんわん



